

都道府県別賞一等

僕たちを支える杖

兵庫県 南あわじ市立三原中学校 三学年

金森 千尋

小学四年生の秋、学校で「お父さんお母さんの仕事について調べる宿題」が出された。そんなとき、ふとお父さんが玄関で革靴を履き勤め先の生命保険会社に向かつていくのを思い出した。それを何気なく見送っていた僕だったが「生命保険って何だろう」と宿題を機に疑問と興味を持った。

単身赴任で東京の生命保険会社に勤めているお父さんは僕が生まれる前から家族の誰よりも保険について真剣に考えていた。父はよく、「何かあつてからは手遅れ。備えあれば憂いなしだ。」と小学生の僕によく口にしていた。生命保険の仕組み、意味について全く関心を示していなかった当時の僕は父の話をつけないがしろにし、「いつ起こるかも分からない事故や死に対してお金を払い続けるなんて、お金がもったいないじゃないか。」と話のたびに思っていた。あまり良い印象を抱いていない。「保険」の会社に勤めている父にも好印象を抱いていなかった。この宿題がなければ、保険についてまだ悪印象を抱いただろう。宿題に悩んでいたある日、祖父の命日として、祖母とお墓参りに来ていた。石碑の前で僕の祖父を思い出した。

僕の祖父は僕が三歳の頃に亡くなった。

「じいちゃん、もうあかん。」

今から十一年前、祖母から母にそう電話がかかってきた。千葉県に住んでいた僕は母に抱えられ、飛んで淡路まで帰ったそうだ。そうやって昔を振り返っていると、隣で線香を供えていた祖母から、

「じいちゃんのこと考えとんのか。」

と凶星をつかれ、僕は話を変えようと咄嗟に宿題の話を持ち上げた。

「そういえば、じいちゃんって何か保険に入っていたの？」

そう問うと、祖母は真剣な眼差しで僕を見て話してくれた。

大腸ガンで亡くなってしまった僕の祖父は生命保険である「終身保険」に入っていた。終身保険とは定期保険とは違い、一生涯保障が続く保険のことだ。

「じいちゃんは自分に何か起こってからでは遅いから、前もって生命保険について勉強して加入していたのよ。自分がガンなのもふまえて私たちを困らせたくないかったんだろうね。」

そうか、僕はこのときようやく生命保険について分かった。生命保険とは自分の利益のためではない、残された人がどう生きるかを左右する大切で誇りの

## 第60回中学生作文コンクール

あるものなのだ。僕は生命保険の大切さに気付いたとき、父に謝りたくなかった。身近にいる人も助けられた生命保険。それに携わっている父に反省とともに尊敬の気持ちが芽生えた。父は生命保険に対して「備えあれば憂いなし」と言うが、他に「転ばぬ先の杖」という言葉もある。生命保険とは僕たちの方が一の杖なのである。何か起こってからでは遅い。だからこそ、安心のための杖を準備したいと思った。